

自然を語る会

2018年5月19日(土) 10:00~12:00

於: 東京ボランティア・市民活動センター

参加者: 16名

担当: 小川真理子さん

『レイチェル・カーソン』 ポール・ブルックス著 上遠恵子訳

第19章 『沈黙の春』から

第19章は、歴史的名著『沈黙の春』(全17章)の中から6つの章の主要な文章が掲載されている。6つの章とは、2章「負担は耐えねばならぬ」、4章「地表の水、海底の海」、6章「みどりの地表」、13章「狭き窓より」、15章「自然は逆襲する」、17章(最終章)「べつの道」。今回は前半の3つの章(2章、4章、6章)について、担当の小川さんの簡潔な概説資料と地図や写真、化学式などの参考資料をガイドに、参加者の皆様とゆっくり輪読を行いながら、カーソンの言葉を噛みしめ、考え、語り合った。以下は各章の主な内容である。

環境と生物の関係は、これまでは環境が生物の形や習性を形作っており、生物が環境を変えた例はめったになかったが、20世紀になって人間が自然を変えうる「おそるべき力」を獲得してしまった。1つは核(原子力、放射線)、もう1つは化学物質。そして”殺虫剤”は特定の害虫だけでなく全ての生物を傷つける”殺生物剤”になっている(2章)。1949年からクリア湖に棲息するブヨ退治のためにDDDの散布を開始したが、食物連鎖と生物濃縮の関係で数年後に多くのカイツブリが死亡。カイツブリの体内からは高濃度のDDDが検出。水中からは次第にDDDの痕跡が消えたがDDDは消失したのではなく他の生物の体の中に居場所が変わっただけであった。(プランクトン→微小なミジンコ→小魚→小魚を食べる魚→鳥→ミンク、アライグマ)。一つの生命から他の生命へと物質は果てしない輪廻の中で流転していく(4章)。植物がなければ地球上の生物は生命を維持することができない。地上の植物は生命の織りなす綾の一部を形づくっており、植物と土壌、植物と他の植物あるいは動物とのあいだには、欠くことのできない親密な関係がある。ところが人間がそれをかき乱している。「殺草剤」がハンノキ、ガマズミ、ヤマモモ、ビャクシンなどの自然林で縁取られた道路へ散布された後は身の毛もよだつような不毛な景色に変わってしまった(6章)。

いずれの章も自然や生物に対して人間の都合だけで解釈し行動を起こすことに対する警笛であると同時に、カーソンの鋭い考察と分析、生命に対する優しい眼差し、美しく詩情豊かな説得力のある文章は、出版から55年経った今もお色褪せることなく、圧倒的な力強さで語りかけてくる。『沈黙の春』の巻頭でアルベルト・シュバイツァーの言葉を引用しているように、その根底にあるのはシュバイツァーの哲学「生命への畏敬」の概念であると言えよう。一方、現代社会に目を向けると、環境問題は日に日に深刻さを増す一方である。

そろそろ立ち止まって「べつの道」を探す勇気を持つ時ではないだろうか？

次回、後半は7月21日を予定しています。

(文責: 柳澤)